練であると思ふ。是は古い言方であるが性格は內部より引出して來るべきもので外部より强制すべきものではない。訓練の方法は結局人間自然の發達の指導である。

此意味を表はすには陶冶と言ふ字より「涵養」と云ふ言葉の方が適切である。「涵」の字は元函の中に水が浸入すると言ふ所から浸すとか潤ほすと言ふ義になり、養と言ふ字は成長せしむると言ふ義であるから涵養とつゞけば草木に水をやりひたしやしなふ義になる。そこで性格の發達を指導して行くのに用ふるには極めて適切である。植物は水さへ適當にやれば自然に發達して行く力を自然に具へて居る樣に人間も適當に指導さへして行けば自然に發達して行く天賦の能力を持つて居る。是が訓練の基礎と思ひます。然らば斯る性格の基礎なるものは何であるかと申しますと、第一には本能を擧げねばなりません。是は自然に人間が有つて居るもので、敎へぬでも活動するものである。第二は個性である、本能は抽象的に言へば誰も同じに見られるが人の天賦の能力は個人に依つて相違がある。是が卽ち個性である。個性も本能と同じく性格の基礎となつて行く。第三には男女の性別卽ち、性的特徵と言ふことも性格の基礎となる。第四には國民に依つて國民性と云ふものが同じく性格の基礎を作つて行くのである。私の考では以上、本能、個性、性的特徵、國民性と言ふものが基礎となつて夫れ等が適當の指導を待つて發達して出來上つたのが個人々々の性格であると思ふ。此等を孰れも遺憾なく發達せしめたのが訓練の成功と言はねばならぬ。人には一般共通の性質がある。此共通性を完成して完全な理想的人間を作らうと云ふ事に大變力を注いで行くと性格の理想がタツタ一つになつて了ふ、卽ち劃一的訓練である。私は此

訓練法は新時代の要求に適せぬと思ふ。現代の社會は、個人の特性卽ち個性の長所を一番能く發揮した者が一番よく社會に値打ある仕事をすることが出來るのであるから飽まで個性を尊重せねばならぬ。尙ほ「性」の事もさうであります。是は極端な考方で男女の差違は全くないもので如何なる性的差別を設くるのも不當であると言ふ意見もありますが、苟くも自然が男女の差を設けた以上は身體の上の違ひばかりではない、精神の上からも違ひはなくてはならぬ。私は女子の性格の上に女性の特徵が表はれて來るのが自然であり且つ人類の幸福を增進する所以であると思ふ。是は玆に詳しく申述べる餘裕はありませぬが、玆には只私の結論だけ申上げて置きます。それから國民性の違ふと云ふ事にも同樣の意味があると思ふ。私の研究の結果では國民性の長所を發揮すると言ふことが民族發展に最も有效の方法である。斯う云ふ風に數へ上げました四つの方面が孰も不當に妨げらるゝ事なしに自由に發達したものが私の性格の理想であると思ひます。自分の有つて居る本能、個性、性的特徵、國民性の孰れも色々の偏見に依り、誤つた考に依つて妨げらるゝ事なく、壓迫せらるゝことが無く適當の指導によつて最も合理的に發達した性格が最も完全に發達したものと見ねばならぬと思ひます。それから性格の訓練は直接と間接との二つに分けます。間接の性格訓練は詰り修身科の任務である。道德に關する敎訓理解を與へて善を好み惡を憎むの情を養ひ善の動機を作らしめるのであります。此點に就いて前に述べて置きましたから省くことに致します。只新時代の要求から考ふれば今日の學校の修身科は遺憾の點が多く大に改造を要する點が多いと言ふことを一言して置きます。

其次に直接の訓練と云ふのは直接に性格を練る方法であります。性格と云ふのは道德を實行する力を指すのでありますから、其道德を實行する力はどうして、出來るかと申しますと、つまる所實行する力は實行に依らねばならぬ。例へば勤勉と云ふ性格を得たいと思へばどうして出來るかと云ふと勤勉の訓話を聞いたゞけではない。實際勤勉にならうとすれば自分から勤勉を實行しなければならぬ。それから節制とか、自制とか言ふやうな自分を抑制する力を養ひたいと思へば同じく訓話を聞いたり又は抑制をせねばならぬと言ふ考を持つたばかりではいけない。幾度となく抑制を實行して抑制の力を得るのである。卑近の類例を求めますれば字を上手に書かうと思へば、只良い手本を澤山見て居るばかりでは上手にならぬ。矢張り自分で字を書かねばならぬ。書は自から書くことによりてのみ上達する。身體を壯健にしようとするには他人の體操や運動を見物して居つたので效能が少い。自分で體操や運動を十分に實行する事に依つて身體が强健になる、訓練の上から考へても全く同一で性格も立派な性格を作出さうとすれば意志活動を中心とした道德の實行に依らねばならぬ。其實行が多ければ多い程性格を練る事も大きい。世の中に餘り學校教育を受けぬ割合に立派な性格を有つて居る人がある事は前にも述べた通りであるが、斯樣の人は學校の修身訓話を聞いた度數は少いが意志を練り道德を實行する機會に實際に多く出會つて居る。勇氣を出さねばならぬ場合に度々出遇つて勇氣を鼓舞すれば自から勇氣が出來る。果斷を以て決しなければならぬ場合に度々出會て果斷を實行するに馴るれば果斷と云ふ力が其處に出て來る。自制を必要とする場合に度ひ出會つて自制を實行すれば自然に意志の自制力が發達

して來る。さう云ふ風に考へて來ると、性格訓練の要訣は道德實行の機會を與ふると言ふ事にある。道德の實行によつて道德實行の力を訓練するのである。是は實行主義とか、鍛錬主義とか申すべきであります。是が卽ち直接の性格訓練方法であります。前の間接の性格訓練と申すのは道德の理想を作り實行を促すまでの準備で直接の性格訓練の基礎となつて行くのである。それでは性格の直接訓練をやる爲めに道德實行の機會を與ふる所は何處であるかと言へばつまり、家庭と學校と社會の三つがある。けれども學校で敎へた道德を社會で實行する場合に社會の道德が非常に違つて居ると假定すれば、性格の直接訓練をさせる上に妨げになる。例へば今日の時勢は公正を尊ぶと云ふ事を要求する。そこで學校敎育で公正の實行を訓練しようと考へても社會も公正を實行せず家庭も同樣で非常に專制主義で人格も何も尊重しなければ、學校で如何に公正を敎へても社會と家庭とで實行する機會が少く、公正の性格の發達を妨ぐる事になる。社會全體が總て事實上誰も秩序を守る者がないとすると秩序を重んずると言ふ性格の訓練は極めて困難である。從つて性格は自然に自由發達を阻害される。學校が家庭或は社會と非常に懸隔した理想を立て、それを實行しようと努めても、折角一方學校で訓練した結果が一方家庭や社會で打壞はされて了ふ、さう云ふ事を考へると玆に學校の性格訓練を有效ならしむる爲には所謂境遇の改善と言ふ問題が必ず起つて來る。最近になつて頻りに生活の改善と云ふ事が喧ましく言はれますが是は生活其物の上から當然の事でありますが性格訓練の上から考へても極めて望ましき事であります。

次に訓練には自ら段階のあると云ふ事を一寸申して見たいと思ひ

ます、是は子供が段々大きくなつて行くにつけて訓練の方法の上に自然に踏むべき段階である。朝顏でも芽生から段々大きくなつて行く階段に應じて、小さく弱い時には大切にしてやり少し大きくなれば左程にしなくて宜いと云ふ風に取扱が違はねばならぬ。是は植木ばかりでない、人間も其通りで其子供の發達の程度に依つて自ら段階をつけねばならぬ。最初にやる訓練の仕方は、

一、規律的訓練或は軍隊的訓練で、詰り父母とか敎師の權威を以て子供に命令して道德を行はしめ之によつて實行の習慣を作る。子供のしてならぬ事は禁止してせぬやうにする。父母敎師は子供を嚴格に服從させる。それに依つて道德に從ふと云ふ習慣を養ふて行く。若し是に從はねば罰を加へる。罰は勵行の手段である。是は子供の小さい時善惡も何もまだ辨へない時分に早くからそれをやらせる必要がある。是は訓練の初步としては當然の事で、又値打のある事である。此段階の特徵は全く兒童の方が受身で、兒童自身が自ら思慮し自ら反省し自ら決意し實行すると云ふ力を持たない時である。けれども此場合に注意すべき事は性格が本能を出發點として次第に發達して行くと云ふ考を正しいものとしますと餘り早くから大人の標準を以て子供にどんな事でも大人の眞似をやらすと云ふ工合になると先刻申した個性を全く顧みないとか人格をまるで無視すると云ふ事になつて性格の自由の發達を害する事もあり得ることであります。次は

二、人格的訓練と申します。是は敎師とか親の權威に依つて行はしめると云ふ强制の意味はちつともなく、命令禁止賞罰の如き外部の手段を用ひず親或は敎師其他の人の人格を以て訓練の基礎とするの

である。前のは從はねば罰せられるのであるが、今度のはさうではない。賞罰の事は少しも言はぬけれども、全く敎師の人物を尊敬する、心服すると云ふ事に依つて感化を受けて行きます。是が段々少しづゝ進んで行くと所謂英雄崇拜と云ふものになるのであります。是は前のに比べると一段進んだもので、色々「斯うせい」「あゝせい」と云ふ命令又は其他の事を禁止すると云ふ事に比べると、餘程違つて居る。罰の恐怖は變じて尊敬となる。自分の先生が夜晩く迄一生懸命勉强するのを見て、子供が遊んで居つてはいけないと感じて進んで自身から勉强する。或は先生に美點があればそれを感心して誰の勸誘を俟たずそれを眞似する。斯う云ふ風になれば是は人格的訓練である。卽ち感心すべき模範があつてそれを學んで居る。故に受身と云へば受身であるが眞似して行く事は自發的に出て來て居つて、唯だ權威に依つて、服從させて行くと云ふ方よりは一段進んだ方である。けれども是が訓練法の最も上乘たるものであるかと云へば必ずしもさうではない。詰り規律的訓練の方は全然敎師の力を本位とした訓練法であつて、人格的訓練の方は、何をして行くにしても敎師の模範に依つてやるのである。敎師は必ずしも眞似せよと言はぬけれども、兒童が自から進んで眞似するのは餘程自發的の要素を含んで居るが兒童を動かす原は矢張り敎師である。其次のは

三、自治的訓練である、是は詰り兒童生徒の自覺に基いて、性格を訓練して行くのである。つまり斯う云ふ社會生活には斯う云ふ事をしなければならぬと云ふ責任の觀念卽ち協同自治の精神に基いて兒童生徒自ら自己の性格を訓練するやうに仕向けて行くのである。詰り外から餘り言はれないでも、生徒が自分の爲すべき事を自分で爲すや

うに段々に指導するのである。理想としては生徒が學校や敎師から訓練されて居ると云ふ事を自覺しないで、學校敎師の指導がよく生徒の自覺と實行を促がし其結果が自然に訓練になるやうになつて行くのである。それなれば一寸考ふれば敎育者の仕事が何も無いやうであるけれども決して左樣で無い。兒童生徒が自覺して自治的に活動して行くやうに學校を仕組み敎育を仕組み指導監督して行く事は中中困難の事業である。例へば遠足とか運動會とか其他何かの事柄であると兒童生徒は非常な興味を有つて自然に良い事をする機會に出會ふ。つまり人生に價値ある幾多の行動をなす機會を得るのみならず知らず識らずの間に之を實行して自己を訓練するのである。例へば朝早く起きると云ふ事柄でも「今朝早く是非起きよ」とか「是非やれ」と云ふ事を命令的に言はれないでも自ら喜んで實行するのである。さう云ふ事を强ひられて命令に從はない場合に罰せらるゝ事を恐れていや〳〵乍らに實行するやうでは自覺ではない。隨つて訓練の效果も少い。それ自然に生徒が自發的にさう云ふ事をする樣に仕向けると夫で以て朝起きの習慣を作ることは容易であり且つ最も有效である。斯う云ふ風な自治的訓練が訓練の理想である。夫は學校で云つたら學校の氣風、校風と云ふものが出來て居れば最も能く實行が出來易いのである。兒童生徒がその空氣の中へ這入つて行くと、誰も自然さう云ふ風になつて行く。訓練されて居ることを自覺せずに實行の習慣を作るのである。夫を敎師や學校が「朝は何時に起きねばならぬ」とか「斯う云ふ場合には斯う云ふ事をせねばならぬ」と云ふ事の規則を作つて置き、規則を楯に取り敎權を振り廻はし外部より壓迫を加へ兒童生徒は嫌々ながら之に從ふて行くと云ふ有樣であれば夫は最も面白く無

い規律的訓練、軍隊的訓練であります。強ひられて仕方なしにするのでなく兒童生徒の自覺で以て自ら喜び勇んで進んで自ら規律を守り道德を實行する樣になれば是は後の自治的訓練と云ふ事になる。規律的訓練は敎師の權威が命令禁止となつて明かに外面に表はれ自治的訓練は兒童生徒の自發的行動を眼目とするから敎師の權威は外部に表はれて來ぬ。而も命令禁止は强制なくして自然に行はれ行くのである。さう云ふ域に達しますのは是は兒童の小い時には出來ない。詰り青年期に達して、人間が獨立する迄に此訓練が出來上れば是が最も理想的である。實際社會に立つて行くと同じ樣の事が學校に於てもやる事が出來れば理想的訓練が出來た譯である。詰り學校で、社會でやつて居る事柄と同じやうな自治の實行が出來る樣になれば是は訓練の極致であると思ひます。人格的訓練は規律的訓練から自治的訓練から自治的訓練に導く中間の過渡的の訓練である。自治的訓練も其初めには敎師の暗示や兒童生徒相互の制裁や側壓が手段として必要である。此等外部の手段は次第に兒童生徒の自覺に化して自治的訓練が完成するのである。

是から改造を要する訓練法、卽ち時代錯誤と思はるゝものを二三申述べて見度いと思ひます。時代錯誤には新らし過ぎるのと、古過ぎるのと、二樣ある。新らし過ぎると云ふ方は割合に少く、多くは古過ぎるのである。今時代後れの訓練法と思はるゝ一、二を擧げて見ると訓練は詰り兒童生徒に柔順な性格を得しむればそれで訓練の目的は達せられたと斯う云ふ風に考へて居る一派がある。私は今便宜上柔順靜肅主義とでも名づけて見よう。此主義ではおとなしい卽ち柔順と言ふことが人物の評價の唯一の標準となつて居るのである。外部の人が

見ても生徒が大變柔順しい、騷がない、從て此學校の訓練が能く行つて居ると思はれて居る。教育界の人々は學校の訓練を判斷するに此標準によつて居るやうである。例へば參觀人でもあると云ふ場合、教師が號令を掛けると、生徒達は挨拶を旨くやる。全校の朝禮などが靜肅でキチンと行く。其他何に就ても兒童生徒の動作が學校で大變細く定めてあつて、其通り柔順に兒童生徒がやれば訓練が徹底して居ると云ふ見方が隨分多い樣である。是は學校訓練の徹底を判斷する一標準であることは勿論である。所が之をモット深く考へて見ると此等の柔順靜肅は必ずしも訓練の徹底の證據では無い。極めて訓練が行屆いて居ると言はれた學校から出た生徒が卒業後學校を出れば打つて變つた人間になる。在學中でも校内と校外とが掌を反したやうに言語動作が違ふことが少くない。質素勤儉を標榜した學校に居つたものが學校では質素勤儉であつたけれども學校を出て仕舞へば少しも效能が無い。其他校風の隨分嚴重で有名な學校から變挺な人間が出て來ると云ふこともある。窮屈な嚴格な規則づくめで少しも自由を許されなかつた學校の寄宿舍生活を送つて少しも世間の活社會に接する機會の無かつた者は學校に居る間は規律嚴肅で柔順の生徒として通つて居つても一旦卒業の後に學校や寄宿と丸で違つた社會に出て諸種の强烈な誘惑や思想に接すれば譯もなく降參して極端から極端に走つて放縱の生活を送つたり危險思想を抱いたりするのは其の實例に乏しく無い。唯だ表面に現はれて居る所だけの器械的奴隷的服從や消極的に斯う云ふ事はしないあゝ云ふ事はしないと云ふて實行されて居ると云ふ事のみを以て訓練の價値を判斷するのは極めて淺薄である。外面の規律に服從するかせぬか丈を訓練の標準にす

ると、詰り一面從僞善の弊を作り出す。即ち形だけで內容がない。是は畢竟訓練の外形のみに重きを置いた爲に本當の意味の性格の發達と云ふ點に於て何等見るべきものが無い。つまり兒童生徒の自發的自治的要素を缺いて居るのである。

其次は劃一的に規律を勵行するに全力を注ぐと云ふ事であります。是は前に述べた柔順靜肅主義と重複する所がありますが是は劃一的なのと極端に規律を勵行するに重きを置く所に特色を有するから假りに劃一的規律勵行主義と名けませう。早く言へば拘子定規主義で弊は拘泥にある。我々は所謂軍隊的の規律に從ふのは一面に於て必要であり又大きくなつてから有效な事であると云ふ事も同時に認むべき事であります。又規律に從ふと云ふ事は道德に從ふと云ふ精神を養ふ事は要點であるけれども此種の訓練は嚴格峻烈な取締に沒頭して、さう云ふ要點には餘り觸れないでさう云ふ値打のある方には力を入れないで、只規律に從ひさへすれば値打があると云ふ、絕對的服從の價値に囚はれ甚しき奴隷的服從を要求して居る。所謂劃一的規律の弊である一、二の例を申すと、倒へば時間の勵行は誠に必要な訓練であるが、時間を守らすと云ふ事が非常に嚴重で、學校に依つては二分以上遲れたら絕對的に敎場へ入れない學校もある。或る學校の如きは試驗の時に一分でも三十秒でも遲れゝば試驗を受けさせないと言ふ規則の所もある。是では時間勵行が人間に最も價値ある事のやうに見える。又生徒が喫煙する所を發見されれば直に退校處分になる所もある。さう云ふ風に規律を極端に迄嚴重にして居る所もあるが一體各方面の敎育を受けさせると云ふ事が學校の目的である、以上は其一部の方面に重きを置き過るのは如何であらうか。殊に僅の遲刻の

爲に敎場に入れぬやうなのは罰の方が非常に大き過ぎて敎育は罰ばかりを專門にするのでは無いかと思はしむる位である。それから制服、制帽、靴などの規則が非常に極端に行き過ぎて、其制服を着ない者は學校に入れない、或は靴は半靴に極めてあるからと云ふので親父の、編上げの靴を穿いて來ては構内に入れない、赤の靴では入れない、黑でなければいけないなどゝ、非常に形式的な、殊に、さう云ふ末に走つて居るものが隨分あつた。是は此間文部省の方から制服に就て訓令が出ましたが、夫は極端に走らぬやうにする爲である。兎に角規律と云ふ事には値打があるが過酷に勵行すれば奴隷的の服從になつて來る。性格と云ふものは外から强制するものではない、性格の基礎は人間の本性である。此本性を成べく能く伸ばして行くのが訓練とすれば少しユトリを附けねばならぬ。人格を尊重する、個性を尊重すると云ふ事、にすれば今少しユトリを附けねばならぬ然らざれば時勢の要求する自制自律による自治の精神を養ふ事は出來ぬ。もう一つは我日本では政治上から言へば自治制であるが、我邦の憲政有終の美を濟すには少くとも在學中に自治の訓練をして置かねばならぬ筈である。然るに動もすれば自治の精神は全然沒却されて敎權萬能主義と言ふ一種の專制主義によつて兒童生徒は壓迫され强制されるのがある。それが煩ひを爲して居るのが大分ある。兒童生徒は恰も人格なき奴隷又は劣等人種甚しきは器械の如き取扱を受けて居る所がある。斯樣の場合では兒童生徒の天賦の德性が自然の發達を遂ぐることが出來ぬのみか、敎師の官僚主義、軍隊主義の爲めに、自重心や自信が重傷を負ふて卑屈な意氣地なしとなつて意志の發達が大打擊を豪むると言ふことが少く無い。賞罰は敎師の特權であると言ふ所から之を濫用して官

僚主義軍隊主義の專制主義を振り廻はされては國民が暴君の支配を受くる樣に兒童生徒は極めて迷惑な次第である。昨今は官吏も軍隊も餘程面目を改めた。殊に軍隊でも昔の野蠻的な訓練は次第に廢れて來た位であるから學校の訓練では兒童生徒の人格を認むることに一段の注意が必要であると思ふ。又敎師と云ふものは生徒に弱點を知られては威嚴を損すると云ふ事から敎師はちつとも自分には惡い事がない、生徒の方が惡いと云ふ、さう云ふ考に囚はれて動もすれば敎權を濫用して非を遂げやうとする傾きがある。此點に就いては敎師は特に反省を要すると思ふ。理が非でも敎師の意志を生徒に强制する事が訓練の全部で無いことを考へねばならぬ。さうすればもう少しユトリを附けて强制よりも指導と云ふ方に値打を見なければならぬ。威壓よりも心服の價値を認めなければならぬ。我邦で勢力のある眞宗の眞鸞上人の言葉の中にも「同行」と云ふ事がある。眞鸞は別に衆人と違ふ人間ではない、普通の俗人であるけれども、他の人と同行で修行して行かうと言ふ趣意である。衆人と懸隔れた高僧が自分一人豪い顏をして居ないで衆人と共々にやつて行くと言ふ態度は眞鸞上人が眞宗を全國に廣げた一因であらう。敎師にも此同行の態度が有り度いと思ふ。敎師も兒童生徒も同じ人間である、僅に一日の長を以て指導するのであると斯う云ふ態度の方が訓練の效果を擧ぐるに有效であると思ふ。それからもう一つ丁度それに伴つて、罰に就いて一言し度い。私の考へでは今日の學校では罰が隨分多過ぎると思ふ。子供が敎師の氣に入らぬ事や妙な遊び方をすると、先生は直ぐに子供を叱る。先生と生徒は叱ると云ふ事、罰すると云ふ事が原因となつて始終讐敵の如く永久の戰ひでもして居るやうな氣分がある。敎師に

は處罰は訓練の別名の如く心得て居るものがある。處罰は敎師の特權として之を濫用せんとする傾向があり叱咤、威嚇、探偵的監督、非行の檢擧を敎師の手柄のやうに思ふて居るらしいものがある。懲罰に服從さすと云ふ事よりも、もう少し、生徒の方の自覺を促して自ら修めて行くとか、自ら自制して行くとか云ふ事を促して行く方が性格訓練上一層有效である。詰り脅し、驚かすと云ふ事よりも、鼓舞し、奬勵する方が兒童生徒の爲になると思ひます。

今迄は敎師の方の側、學校の方の側を申したのでありますが、尙ほ敎育を受ける兒童生徒の方にも時代錯誤があります。唯今申した通りに敎師の方は何方かと云へば時代後れで古過ぎて時勢に適應して行く事が出來ぬ人がい多けれども生徒の方は反對に新らし過ぎる方が多い。新らし過ぎるとはどう云う事かと言へば理想の方が行過ぎて現實と餘にかけ離れてどうしても實行の出來ぬやうなものが多い。青年期には今に限らず昔から此特色を表はすのである。例へば自分は人間である。精神さへあればどんな事も出來る。金がなければ働いてやらうと云ふ志で、我家を無斷で飛び出し苦學をやるはやつて見るけれ共、たうとう失敗して、不良少年になつたり、或は鄕里へ歸ると云ふ事が、少年時代にも、青年時代にもある。青年は理想に走り易い。是は青年期の特徵であります。さう云ふ風に青年期には新らしい理想に走り過ぎると云ふのもあるのである。何時迄も子供の積りで舊式の訓練方法をやり、何時迄も外部から檢束し、服從せしめ樣としても成功は覺束ない。只命令的に注入的に中江藤樹の眞似をせよ、或は二宮金次郎の眞似をせよと言つてもさう云ふ事は青年の氣分には合はない。青年と云ふものは前に申した通り一寸新し過ぎる傾きがあるか

ら今の通りに無闇に服從とか模倣とかを強ふるのは發達の程度に合はない。青年時代にはどう云ふ方法が一番有效であると云ふと自治的の訓練卽ち青年自身から自覺して進んで行ふ訓練が最も有效である。そこが能く敎師に分つたゞけでなく青年自身に其事が分つて居らねばならぬ。青年の訓練は、修養努力が其本質である。青年にそれが分らないで、自分には何もしないで、自然に性格が出來て行くと云ふ樣に考へたら何十年待つて居つても決して良い性格は出來ない。中學校其他の青年は、學校の敎育のしやうが惡いから出來損なつたとか、或は思ふやうにいかぬとか、或は社會が惡いから我思ふ事がどうもいかぬとか、社會が惡い青年を拵えるのだと言ふやうに青年の罪を悉く學校や社會に轉嫁しようとするのは性格は結局自己の努力修養によつて出來上ると言ふ原則を忘却した結果である。性格の訓練は青年自身の努力青年自身の自覺が本質である。最初は外から導て行き、漸次、自身自ら自覺し自ら努力する所に訓練の終局の徹底があるのであります。先刻申したやうに今日は實力競爭時代でありますから新らしい時代の人物は此社會に生活するに必要な實力を十分に有たねばならぬ。而も其實力の基礎は性格でなければならぬから性格の訓練は實に新時代の根本的の要求である。人の成功も失敗も國家の盛衰も要は性格の如何に歸着する。而も性格の眼目は自己の努力修養にあることを青年に會得さす事が最も大切である。最初は敎師とか、親が、導いて行くけれども後には生徒自身が自身を導いて行かねばならぬ。敎師が能く此邊の消息を心得て居て次第々々に自治的に導いて行くやうにしたい。又生徒の方にあつても、何時迄も模倣したり服從したりして行く事計りを本領と心得て居る事は宜くない。夫れは青

年の時代の誤で、何時迄も人の眞似をし命令に服從さへすれば一番良い性格が出來ると思ふのは訓練を受ける方の側の誤りである。性格は自己の天賦の性に本いて自己の努力によりて完成するものであることを徹底させねばならぬ。

結論

自分は道德の根本は古今東西に共通のものであると確信するのであるけれども其の實際生活に於ける活用に於ては時勢の推移と共に絶えず進歩すべきものであるとおもふ。卽ち時代時代の道德思想の內容は進歩發達すべきものである。道德思想の內容が進歩發達すべきものとすれば德育には常に革新改善が行はれなければならぬことは當然である。歐州大戰の後を承けた今日の新時代は特に其の機運に迫つて居るのである。輓近時代思想の變動は所謂世界改造の問題を惹起した。改造問題は其の如何なる方面に於けるものも一層高尙なる人道的社會の出現を理想とし人類全體の幸福の增進を追求して居るけれども一歩を誤れば不健全の思想に傾かんとする虞が伴つて

居る。自分は思想問題に就いては積極主義を取るものである。現代思想の正しき合理的の要求は之を文化發達の正統と認めて之を採用し民族の生存を完うし其の發達を圖ると共に人類の進歩に貢獻せんとするものである。否自から進んで世界の大勢を觀破し時代思潮を率ゐて行く抱負がなくてはならぬと信ずるのである。而も民族の生存は世界改造の根本であつて民族的自覺を以て其の生命とするのである。故に時代思潮の要求を充し人道的社會を實現せんとするには民族的自覺から出發せねばならぬ。自分の所謂民族的自覺は偏狹なる愛國心を指すのでは無くて、理智の指導せる熱烈な愛國心である。人道の理想と調和し國際的連帶責任の觀念に基き、自國を愛すると共に外國を尊重する國民精神である。人道と民族的自覺との關係はやがて人道と國民道德との關係となつて來る。自分の所謂國民道德は日本に於ける人道の實現であつて大和民族を結束統一し其の生存を完うし其の發達進歩を遂げしむる原動力となるものである。保守に偏した固陋頑冥なる陳腐の舊思想でなく時勢に先じ時勢を率ゐ民族的自覺を促し國民をして益努力奮鬪せしむる進歩的思想である。國民道德と民族的自覺とは一物の兩面で共に民族をして世界の大勢に順應し而も民族の理想を實現せしむる根本である。新時代に於ける民族的自覺の喚起と國民道德の振興とは德育上の重要問題と言はねばならぬ。此等の重任を擔ふべき修身教授と性格訓練とは共に時代の推移に鑑みて方針の革新を行はねばならぬ。而も其の要訣は人間天賦の德性を本位とし之を誘導啓發して時勢に適應する發達を遂げしむるに在るのである。德育問題は新時代に遭遇して何等等閑に附せらるべき理由は無のみならず時勢が切實に其講究を要求し德育の

振興を促して止まぬのである。德育問題は學者敎育家の專有すべき問題ではない。民族全體の問題である。個人の運命を左右する問題である。著者は我同胞と共に眞面目に此問題を研究し一歩にてもよりよき解決に達せんことを熱望して已まぬものである。

新時代の德育　終

大正十年一月十七日印刷
大正十年一月二十日發行

新時代の德育
正價金參圓

著作者　野田義夫
發行者　合名會社弘道館　代表者　辻本卯藏
東京市神田區北神保町十一番地
右代表者
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

日清印刷株式會社

複製不許

著者檢印

發行所　東京市神田區北神保町十一
電話九段一三六八番
一五三二番
合名會社　弘道館

テトIF-38

終